

第6回戦争遺跡保存 全国シンポジウム 山梨大会成功裏に終了 来年は大分県宇佐市で実施予定

日吉台地下壕保存の会などが主要な構成団体である戦争遺跡保存全国ネットワーク主催第6回戦争遺跡保存全国シンポジウム山梨大会が8月23～24日甲府市内の山梨学院大学を会場に200名からの参加で行われ、開会式、地域報告、分科会、閉会式、総会と全国の戦争遺跡の保存運動について熱心な討議が行われ、成功裏に終了しました。

大会概要

この大会はこれまで松代、沖縄、京都、高知と行われ、去年は川崎平和館及び法政二高で日吉台地下壕保存の会などが主たる受け入れ団体として活動し、山梨に引き継いだものです。

神奈川からは山梨、長野に次いで多い15名が参加し、フィールドワーク、開会式、分科会など多くの場で神奈川の活動について報告しました。

【1日目】

フィールド・ワーク 午前中は、全国から約80人の参加で韮崎市の七里岩地下壕と甲府市の山梨大学附属中学校内の赤レンガ館（旧陸軍甲府連隊倉庫）を2台のバスを仕立てて見学しました。

七里岩地下壕 長野方面へ向かって国道沿い、左手に釜無川が流れ、その右手に韮崎平和観音のある、延々と続く大きな溶岩台地が七里岩です。その下に沿って約6キロに渡り、アジア太平洋戦争末期、約20の地下壕群が掘られました。立川飛行機の戦闘機生産地下工場など本土決戦に備えた体勢作りがここで

素堀状態の七里岩地下壕見学の様子

行われていたのです。保存運動を進めている地元の小学校の先生などが案内してくださり、また勤労働員で地下壕を掘った地元の旧制韮崎中学校の卒業生の方などが当時の思い出も含めて地下壕について説明してくださいました。地元の保存の会では韮崎市に対し史跡指定の陳情を続けていますが、危険、戦争認識の違い等を理由に行政の腰は重いということです。

甲府歩兵第49連隊赤れんが糧秣庫 甲府駅の北側山梨大学キャンパスは旧陸軍甲府連隊跡地で、そこに明治時代日露戦争後から使われていた赤れんが糧秣庫が残っています。最近になって、この取り壊しの話が持ち上がり、地元の保存運動団体の働きかけで、赤レンガ館として保存、活用されることが決まり、内装、外装など工事が行われ、公開されたものです。内装はコミュニティー・ホールとしてかなり手が加えられ、各種のイベントや展示会などに使用できる空間となっていました。有効利用を重点に工事が行われたようで、昔の様子を知る資料等の展示も説明板もなく、戦争遺跡の保存のあり方として、どうかという議論がこれから必要になってくると思われますが、とりあえず保存、活用が行われるようになったということは地元の保存運動の大きな成果でしょう。大学キャンパス内の戦争遺跡の保存、活用のあり方という点で日吉台地下壕保存の会の運動にも大きな示唆を与えてくれるものでした。

開会式 開会式は山梨学院大

学のホールで行われ、山梨から十菱駿武氏が歓迎挨拶を、そして村上有慶戦争遺跡保存全国ネット代表が主催者を代表して挨拶しました。更に村上氏は基調報告でこの間発表された文化庁詳細調査について、資料をもとに分析を行いました。村上氏は「文化庁からの発表は各自自治体から出された所在調査をもとに行われているが、その提出基準が曖昧で50戦跡以外にも当然対象にならなければならないような遺跡が対象になっていなかったり、対象にされた基準が曖昧だったりしている。とりあえず報告が出たことは評価できるが、

山梨大学教員が館前にて

内容をよく吟味して、広がり内容のある保存のあり方がなされるよう運動を更に強めていこう」と呼びかけました。また、「21世紀における戦跡保存運動の課題」と題して行われたシンポジウムでは松代の大日方悦夫氏が「平和教育にとっての戦争遺跡」として松代大本營の保存運動の中で高校生が力を発揮し変わっていく様子を語り、群馬の菊池実氏が「戦跡考古学からの報告」としてアジア太平洋全域に広がる戦争遺跡の調査のあり方を自らの中国・関東軍要塞の日中共同調査の経験を踏まえて話されました。また京都立命館大学平和ミュージアムの山辺昌彦氏は「平和博物館をめぐる現状について」各地

で取り込まれ新設されている平和博物館の運動の前進面と内容への攻撃など平和博物館建設運動のおかれた状況について話され、運動を更に強めようと訴えました。その後中国黒竜江省革命博物館副館長、干濱力氏が特別報告として旧「満州国」関東軍国境要塞の発掘共同調査の進展とこれまでの研究協力への感謝、これから日本・中国・ロシア共同で調査研究を平和と友好のために行っていきたいという希望を通訳付きで話されました。戦争をした国の国民同士が平和のために戦争遺跡の保存につい

地域報告で日吉台の保存運動の現状について報告する大西会長

て話し合うという、戦争遺跡の保存運動の国際化という意味で大変興味深い内容でした。また地域報告では日吉の地下壕保存の会の大西章会長と運営委員の茂呂秀宏氏が昨年の全国大会後の日吉の保存運動の進展と行政への働きかけ、また文化庁発表後の行政の変化について報告しました。

交流会・宿泊 宿泊は石和のホテル「石庭」で全国から戦争遺跡の保存運動を続けている仲間たちが一同に会し、夕食時の交流会で懇親、山梨名物ほうとう料理に舌鼓を打ち、温泉の檜造り露天風呂でゆったりと疲れを癒しました。

【1日目】

第1分科会

新井揆博

第一分科会では「戦争遺跡の保存運動の現状と課題」をテーマとして、43名の参加で報告・討議がありました。報告は①「郡内の戦争遺跡（大月防空監視哨を文化財に）」②「日本空襲で墜落した米軍機の遺物・慰霊碑等について」③「国立ハンセン病療養所『沖縄愛楽園』の戦争遺跡」④「『武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会』の活動について」⑤「調布飛行場の掩体壕保存運動」⑥「日吉台地下壕の保存運動」⑦「宇治火薬製造所と赤れんが建築の保存（高校生と学ぶ戦争遺跡）」⑧浅川地下壕「この1年間の活動」⑨「戦争遺跡は語る『軍は国民を守らなかった』と」⑩「松代大本営ガイド養成講座の実施について」の10本のレポートに及び、限られた時間の中で、それぞれ各地の特徴を踏まえた戦争遺跡の掘り起こしと保存運動の実戦報告と討議が行われました。

本会からは、新井揆博が昨年来の「日吉台地下壕保存運動」を報告しました。

その概要は①昨年、横浜市行政が地下壕の「学術調査を行うことは困難」であると、地域の文化財の判断責任を回避する中で私たちは横浜市議会の良心に訴えるべく艦政本部地下壕保存の請願署名を行いました。そして、請願は常任委員会（大学教育委員会）に付託されましたが、わずか二十分で不採択になったこと、その後、横浜市は文化庁が行う近代遺跡所在調査（戦跡）の動向を見て、私たち保存の会のかねてからの「地下壕の入り口を開け、学術調査が出来るよう要望を聞き入れ話し合う姿勢を示し始めたことなど、状況の変化を紹介しました。

②慶應義塾による連合艦隊地下壕の整備によって、市民・大学職員・学生・横浜市小中学校教員・小・中・高校生など幅広い層が安全に見学できるようになったこと。また、地域の小学校6年生の見学と研究授業の実践を紹介し、保存運動の広がりにもつながってきていることを報告しました。

③会員による学習会の取り組み 元軍令部第三部（情報部）理事生・通信兵の方々をお招きして、戦争体験を聞く。案内用パンフのため学習会。その他文献学習を行い、会員の戦争認識を深めていること。

④平和のための戦争展に向けて、今年は従来の企画に加え、戦時下の慶応日吉キャンパスの写真展示も予定しており、学生を含めた多くの若者の参加を期待していること。イベントとして、私たちが著した『戦争を歩く・見る・触れる』をもって多摩丘陵の戦跡を見学することによって戦争認識を深めつつあることを報告しました。

⑤これからの運動

◆私たちは、これからも日吉台にある戦争遺跡について調査研究活動を深め、見学会の内容を充実させる。

◆見学会などを通して積極的に地域の教育活動（歴史・平和活動）に協力していく。

◆日吉台地下壕の保存と活用のために、全国の戦争遺跡の保存をすすめる会との連携を深め、地域の方々とも協力して慶應義塾・横浜市・神奈川県・国への働きをすすめた」と報告を結びました。

文化庁は、今年8月1日、近代の戦争遺跡を50箇所選び、詳細調査にはいることを明らかにしましたが、その中に海軍省艦政本部地下壕（箕輪）と連合艦隊地下壕（慶応日吉キャンパス）を含む「日吉台地下壕」も詳細調査の対象になりました。アジア太平洋戦争末期に海軍の中枢が日吉の陸（おか）に上がり、地下に潜った戦跡。この戦跡をどう残し次世代へ平和を伝えていか、大きな課題です。会員の皆さんと一緒にこれらの課題に伝えていきたいと思えます。

第2分科会

「人間何ごとかをなせば悔恨あり」

関崎 益男

第2分科会は「戦争遺跡の調査方法と保存技術—調査・保存のための方法・技術等—」のテーマで中国・日本各地の報告がなされた。日吉台地下壕保存の会「戦争遺跡を歩く・見る・触れる—横浜・川崎平和のための戦争展2002プレイベントの中間報告」は全体の討論の流れから言うに失敗だった。例年この分科会は発表者が少なく、参加者も少ないと聞く。しかし今年のように7本のテーマに沿った報告がある場合はなおさらだ。今後、分科会の設定も再考の必要があるろう。（例えば特設分科会）またメンバーからは「内容は分かったが声が小さい」との指摘を受けた。分科会のテーマに合わない内容の報告は、今後大会が継続すれば無くなっていくだろう。

さて、他の7本のレポートはよかった。

①赤レンガ館の歴史的意義について（山梨戦跡ネットワーク、久保田要）久保田氏は建築士の立場から山梨大学赤レンガ館の保存の意味するものについて報告された。1億円かけて保存した、この建物をどう県民のために活用するかが今後の課題だ。

②私が経験した中日共同調査（中国・東北烈士記念館、王功天）王さんは、国境付近の調査・共同調査の困難さを発表された。要塞とはいくつかの壕の集合体で、日本人がつくった戦争遺跡だ。軍隊の許可の必要で調査は命がけだと語った。

③旧満州における戦争遺跡の調査（関東軍国境遺跡研究会、伊藤厚史）伊藤氏の報告で、対ソ戦闘・安達（あんだつ）実験場遺跡のことが理解できた。また日本軍・中国・ソ連製の地図（標高・呼称などの異なる）の活用の難しさも分かった。

④浅川地下壕の測量調査と記録（浅川地下壕保存を進める会、峯尾邦彦）若い峯尾氏からは、イ、ロ、ハ地区の地下壕の概要と現況が報告された。

⑤「自然洞窟（ガマ）をどのように測量するか」（沖縄平和ネットワーク、大城牧子）若い大城さんはガマと人工的な防空壕との区別を明確にし、暗い複雑なガマの中の地形での測量の問題点を訴えた。

⑥松本里山辺半地下工場の発掘調査（松本市教育委員会文化課、熊谷・沢柳）両氏の報告から、今後も行政とのパートナーシップの重要性を再認識した。

⑦舞鶴の東山地下壕（山梨学院大学考古学研OB、後野裕昭）若い後野氏の報告から学生時代の興味・関心を社会人になってから継続していくことの大切なことを考えさせられた。

今後この分科会の充実と発展を予感させられる大会となった。

第3分科会

富澤 慎吾 ・ 岡上 そう

第3分科会のテーマは「平和博物館と若者への継承」で、全部で10本のレポートが提出されました。午前中は全国各地から次のようなレポートが発表されました。

「平和博物館・平和博物館建設運動の現状と課題」（高知）

「学生の戦争観・平和意識と立命館大学平和ミュージアム」（京都）

「『教科書が語る20世紀展』を通じた次世代への継承」（大阪）

「東京大空襲・戦災資料センター設立までの経過と設立後の反響と課題」（東京）

「第五福竜丸展示館で若い世代に伝える取り組み」（東京）

「ヨーロッパの戦争記念物・戦争遺跡をめぐる」（山梨）

「ホロコースト博物館について」（東京）

各報告の後にはそれぞれ5分間の「質疑応答」の時間が設けられていましたが、この時間枠を越えて熱心な討議が繰り返されました。昼休みをはさんで午後には3本のレポートが発表されました。

「地域の戦争遺跡を平和学習に活用するために」（沖縄）

「七里岩地下壕の保存を学校教育にどう活かすか」（山梨）

そして一番最後が我が日吉台地下壕保存の会の「有事法制と国家総動員法・日吉台地下壕」の報告でした。

〈日吉台地下壕保存の会からの報告の概要〉 報告者 富澤慎吾・岡上そう

日吉台地下壕保存の会からのレポート〈「有事法制と国家総動員法・日吉台地下壕」〉は次のような問題意識の元に会員の岡上・富沢が共同で準備したものです。

「今こそ“現在”（いま）につながる保存運動を！—〈過去におきた戦争〉といま私たちが直面している問題（有事法制）」。その二つをつなぐものこそ、私たちの戦争遺跡の保存・調査活動だと思います。保存・調査活動により、積み上げてきた貴重なデータを今こそ『平和のため』に生かす“その時”なのではないでしょうか？」（レポートの「まとめ」より）。そして分科会での発表は若者の代表として岡上会員（26歳）が行いました。

「私たちは『有事法制反対』のデモや集会にはじめて参加し、そこで『今こそ立ち上がるときだ』と思ったのです。」「何故なら『有事法制』は戦前の『国家総動員法』と変わらない内容であるからです。（引用はレポートより。以下同じ）

日吉台では海軍の地下壕建設に伴い、「国家総動員法によって」民家の強制移動が行われました。この「民家の強制移動について、自分たちで調べて」みたところ、①艦政本部地下壕の出口付近では「地下壕から掘りだされた土砂によって台地の様に地形が変化」していたり、シャベルで〔民家の〕庭の土を掘り起こすと、粘土質の岩石のかけらがゴロゴロと出てくる。②連合艦隊司令部地下壕の東側民家の敷地の中には、当時「掘り出された残土」で「今でも約3メートルの大きな段差が残っていることがわかりました。今、有事法制が制定されてしまったら、このような事態が再び起きてしまうのではないのでしょうか？

だが、こうした“現在（いま）”の問題をめぐって「若い世代の人と『平和』というテーマで語り合えるため」には「扉」が必要だと思います。いま私たちは「地下壕の中でライブイベントを開くことを計画しています」が、「『音楽』」だけじゃなく『美術』や『演劇』など様々な「扉」を開けて、若者達が入ってくるようにしたいのです。一レポートの最後にはこのような若者達による保存運動に向けての

全国ネット第三分科会「平和資料館と若者への継承」発表風景

問題若者達による保存運動に向けての問題提起で締めくくられています。分科会では時間の制約で討論が出来ませんでした。どうか忌憚のないご意見をお寄せ下さい。

全国戦争遺跡パネル展 大会と併行して、山梨学院大学12号館で戦争遺跡のパネル展示が行われました。日吉台からも出展されましたが、全国各地に残る戦争の傷跡を一時に知ることが出来、印象深いものがありました。

閉会集会 分科会の後、行われた閉会集会では、各分科会のまとめの報告と来年度の全国大会開催地の発表があり、大分県宇佐市の保存団体から開催へ向けての決意表明がありました。大分県宇佐市は宇佐八幡宮の宮どころであると同時に、旧陸軍航空隊宇佐飛行場の掩体壕が全国に先駆けて市の史跡指定されたところでもあります。宇佐からすぐ近くの中津は日吉に縁の深い、慶應義塾大学創設者福沢諭吉の生誕の地でもあります。また大分県杵築市は日吉台連合艦隊司令長官豊田副武の出身地です。来年も是非神奈川から大挙して歴史の宝庫大分まで訪れ、戦争遺跡の保存をめぐって九州の方々との交歓が出来たら良いと思います。

ネットワーク総会 総会では、ネットの会計報告や事務報告とともに大会の運営についても話されました。ネットワークの運営そのものが殆ど松代保存の会に頼っている体質は変わっていません。会員や参加団体を増やし、会費収入を増やして、独立し、ネットワークをより全国的な活動にしていくことが、平和のための保存運動の発展につながっていくに違いありません。日吉台保存の会の方々のネットワークへの参加を呼びかける所以です。また発表時間が一人15分、質疑5分と短く、せっかく遠方から細かく調べて参加しても、不完全燃焼のまま帰る事になるという来年度の大会に向けての課題も出され、また会報の発行回数が少ないという問題も指摘されました。

こうした問題を含みつつ、総じて神奈川大会に続く山梨大会は内容密度ともに濃く、意義の深い大会だったと思います。主催された現地実行委員会の皆様、及び主体となって大会の全国事務を支えてくれている松代保存の会、全国ネット事務局の方々の労に篤く感謝し、来年の大分大会にむけ、日々の保存運動を続けたいものです。

第10回横浜・川崎平和の ための戦争展へのご参加を

会場 慶應大学日吉キャンパス

日時 2002年10月13日(日)～14日(月)

(展示は10月10日(木)～14日)

日吉台地下壕保存の会が、主要な構成団体として行われる横浜・川崎平和のための戦争展は今年で10回を数え、標記の日時、場所で、また下記の要領で実施されます。

文化庁の近代遺跡詳細調査の対象として、日吉台地下壕は国の史跡候補としてAランクに位置することが発表されました。このことを受けてこの展示会を成功させることは地下壕の保存・調査・公開・資料館の設置等を目的とする会の活動に大きな力になります。会員の皆様の積極的なご参加をお願いします。

記

1. 趣旨及び経緯

新しい世紀を迎えたとき、人々は戦争のない平和な世界がきたような明るい希望をいだきました。あまりにも悲惨な二つの世界大戦と、絶え間のない内戦や紛争の世紀、20世紀が終わることで、世界がすっかり生まれ変わるような、楽天的な気分が生まれていました。しかしそれが何の根拠もない幻想であったことは、2001年9月11日のアメリカでおこった衝撃的なテロと、それに続く容赦ないアフガンへの報復という大儀のもとでの空爆によって、思い知らされました。

敗戦から57年目のこの年、私たちが戦争遺跡が先の大戦の愚考を語る「語り部」として、保存と活用を進める活動はますます重要性を増してきました。自分の住む地域に残る戦争遺跡を知り、学ぶことが、戦争の実相を認識し、平和な社会を築く力となると考えるからです。活動の一環として「横浜・川崎平和のための戦争展」を9年間行ってきました。「日吉台地下壕」「蟹ヶ谷地下壕」「登戸研究所」の3つの戦争遺跡の写真や遺物の展示がもっとも重要な位置をしめました。5回目からは慶應義塾生の特攻隊員、上原良司の遺書や遺影も並べ、おおきな反響を呼んでいます。

展示のほかには、講演やシンポジウムも行い、毎年大勢の聴衆を集めています。とくに高校生や大学生有志による研究発表は、次世代を担う若者の意識の高さを知ることが出来、戦争体験世代と戦争完全非体験世代との間に、信頼関係を結ぶ絆となっています。

昨年(9回目)は、「戦争遺跡保存全国ネットワーク全国大会」との同時開催となり、2日間で700人以上の参加者がありました。このネットワークには全国およそ30団体が加盟し、戦争遺跡の調査研究と保存に向けての活動を行っています。日吉台地下壕保存の会はネットワーク設立時からの加盟団体です。

今年8月、文化庁は近代遺跡として史跡指定のための詳細調査対象50戦跡を発表しました。日吉台地下壕と登戸研究所もその中に含まれています。今年10年目の節目の戦争展は戦時下の日吉キャンパスの写真を中心にした展示を来往舎ギャラリーで行います。13日午後には岩井忠

熊立命館大学名誉教授（日本近代史）の海軍特攻隊員としての体験に基づく講演会が開かれ、また14日午後は若者たちの平和をつくるための提案が行われます。両日とも午前中は地下壕見学を行います。

2. テーマ「日吉キャンパスに見る戦時下の青春」

3. 主催・後援・実施団体

主催 横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会

後援 神奈川県（予定）・横浜市（予定）・横浜市教育委員会（予定）

実施団体 日吉台地下壕保存の会 川崎平和ウォーキングマップ作り実行委員会
蟹ヶ谷通進隊地下壕保存の会

4. 開催日程 2002年10月13日（日）14日（祝）午前10時～午後5時
展示は10月10日～14日

5. 代表 白井厚（平成帝京大学教授 慶應義塾大学名誉教授）

大西章（日吉台地下壕保存の会代表 慶應義塾高校教諭）

副代表 新井揆博（蟹ヶ谷通信隊保存の会代表） 須田倫太郎（人形劇作家）

渡辺賢二（明治大学講師 歴史教育者協議会常任委員）

6. 会場 慶応大学日吉キャンパス来往舎 入場無料
（地下壕見学は事前申込み必要・資料代500円）

7. 内容

(1) 展示 日吉キャンパスに関する写真を中心に戦時下の青春像を明らかにする。
戦時下の写真や戦没者（慶応関係者）の遺品の展示

(2) 講演・シンポジウム

講演 13日 午後1時30分～3時「特攻隊とは何だったのか」
岩井忠熊氏（立命館大学名誉教授〈副学長歴任〉）

シンポジウム 14日 午後1時30分～3時
「若者からの提案：体験を受け継ぎ、そして平和を創る」

(3) フィールドワーク 日吉台地下壕見学 事前申込み必要

10月13日・14日 午前10時～12時（両日とも）

8. プレイベント 戦争を歩く・見る・ふれるーピースロード多摩丘陵ー
多摩丘陵の戦争遺跡を訪ね歩く、5回連続、歴史散策を実施
（6月から10月まで）

9. 連絡先 横浜市港北区下田町5-20-15 亀岡敦子 TEL045-561-2758

第10回横浜・川崎平和のための戦争展

講演：講師紹介 岩井忠熊氏（立命館大学名誉教授：1922年生まれ）

専攻 日本近代史

今年夏、兄岩井忠熊氏との共著「特攻」（新日本出版社）を刊行。慶大哲学科の兄は「回天」と「伏竜」の訓練を受け、京大史学科の弟は「震洋」隊とともに特攻隊員として死と向き合う。表紙には「自殺兵器となった学徒兵兄弟の証言」

とある。他に『明治国家主義思想史研究』（青木書店）『天皇制と歴史学』（かもがわ出版）『学問・歴史・京都』など著書多数。京都市在住。（講演録明掲）

横浜市教育委員会文化財課と 地下壕保存の会との話合いの報告

茂呂 秀宏

文化庁は8月上旬に日吉台地下壕（箕輪の艦政本部を含めた）を戦争遺跡の史跡指定のための詳細調査対象にすることを発表をしました。それを受けて日吉台の地下壕保存の会は、去る8月19日（月）の午後、横浜市教育委員会文化財課及び危機管理室とそれぞれ話合いを行いました。これまで、文化財課は国の判断が出なければ横浜独自には動けない、危機管理室（旧災害対策室）は、住民の安全ということを優先して工事を行うという立場を大枠取ってきましたが、今回の文化庁の決定を受け、調査や保存に関して、これまでとは、少し異なった態度が垣間見られた話合いでした。

以下その話合いの概略を紹介します。（この内容は、保存の会でまとめてあります。）

●文化財課との話合いの概略

- 保存する会（以下保とする）・文化庁が詳細調査50ヶ所を決定したと新聞報道されているが、横浜市は、事前にどのような報告を受けているのか。また、その決定に対しての認識を聞きたい。また、今後どのようにしていくか意見交換をしたい。
- 文化財課（以下文とする）・今回の文化庁の決定はわれわれも新聞報道で知った。今新聞報道以上のことはわからない。
- 保・私たちは、文化庁と事前に話合いをしている。また、国会でも質疑がなされている。そこで文化庁は、地方のことは指導できないといっている。横浜は横浜の独自の姿勢でやってほしいと思うがどうか。文化庁は調査を地方の専門家に委託するかもしれないといっていたがどう思うのか。
- 文・調査は文化庁がやることで地方は関与しない。保存をだれがやるのかということは、文化庁の言うような一般論としてはわかる話である。調査方法については、別の機会であるが、地方に全てを任せると全国ばらばらなるという恐れを文化庁が持っているということは聞いている。文化庁が地方に任せるとはわからない。自治体に任せるとすれば、市民団体の実施している調査も考慮したい。文化庁から詳細調査をやるという方向が出たので、その方向に沿ってやっていきたい。
- 保・調査のために危機管理室での工事を中止させるという考えはもたないのか。調査が決まったということは、保存ということも考えていかなければならないのではないのか。
- 文・50ヶ所の詳細調査の場所が決まったと理解している。それをさらに絞り保存するかどうか決めると理解している。これからの工事については、一度工事したものを調査のために再びやり直すということは避けたい。
- 保・今までの工事で、トロッコのあとが崩されてしまったり、木札がなくなったりしている。また、公園の下の壕の入口が封鎖されたので、空気が悪くなっており自主調査する上でも危険である。なんとかしてほしい。また、産経新聞に、調査が決まったので、入口の工事の

方法については別な方法を考えなければならないという危機管理室の見解が出されているが、文化財課として、どう把握しているのか。

文・危機管理室と確認を取っていない。すぐ問い合わせる。

保・保存の会の要望としては、調査のため工事をストップしてほしい。たとえ継続する場合でもトロッコ跡のように現況を破壊しないようにしてほしい。既にやってしまったところについては、自主調査のために、入口をあけ、空気流通を可能してほしいということでよいか。それ以外に、今後の問題として、詳細調査の先には、保存という問題が必ず出てくる。横浜市としてどのように保存していくのか独自にそろそろ考えてほしい。慶應大学も独自の調査をし始めている。地下の保存だけでなく、寄宿舎の保存も大事。保存する会では平和資料館建設の構想なども考えている。慶應大学への働きかけを含めて、文化財課独自の姿勢で保存を考えてほしい。

文・文化庁の姿勢がはっきりだされたので、その方向でやっていきたい。

●横浜市危機管理室との話合いの内容

保・文化庁の決定をどうとらえ、また、今後の工事をどのようにするのか。産経新聞にあった別の方法というのどういうことか。

危機管理室（以下危とする）

危・工事の現況と今後の予定を発言する。（略）問題はH14年の秋に工事する保存の会に答えていた1～2本目の西側の部分である。基本的には、調査を優先し文化庁の調査の予定がわかるまで手をつけないと今のところは考えている。ただ、科学的に調査はする積もり。保存する場合もどのような工事必要かは考えたい。例えば、埋め戻すのではなく、大谷石がとられて下の部分のないところは、そこを補強するという考えはある。

保・埋め戻し工事で、遺跡が破壊されている。また、南部分では入り口が塞がり、空気がよんでいる。自主調査の安全性を確保するために、入口は封鎖せず、扉にしてほしい。また、南部分については、空気の流通を確保するために工事をしてほしい。

危・扉は、北側部分の3本目のところは県の実情が必要だが、保存の会と住民が合意し、鍵の管理を自分たちですするというならば、市は意見をいう立場にはない。そうなれば県には、市ができることはする。5本目のところは、県の工事外だから、県の実情は必要ない。保存の会と住民の問題である。公園の下にはいるのは5本目のところはあけておかなければならない。公園部分の空気の流通の確保については、検討はする。

以上

活動の記録 2002年6月～9月

2002年

- 6/26 地下壕見学会 駒林小学校・日吉台小学校職員 40名
 6/27 第1回運営委員会 会報63号発送 (慶応高校物理教室)
 6/30 定期見学会 15名 (一ツ橋大学浜谷ゼミ他)
 7/13 地下壕見学会 日吉台西中PTA 38名
 7/20 地下壕見学会 ピースサイクル神奈川 16名
 7/21 平和のための戦争展プレイベント Bコース宮崎台を歩く 20名
 7/23 第2回運営委員会・平和のための戦争展横浜川崎実行委員会
 7/28 定期見学会 40名 (日本科学者会議・平塚平和ツアー・矢上小)
 8/4 日吉台連合艦隊司令部・艦政本部地下壕調査 (学術フロンティア研究)
 8/9～11 平和のための戦争展 in よこはま 展示参加 (神奈川県民センター)
 8/11 地下壕見学会 鶴見区生涯学習「おっさん」ネットワーク他 41名
 8/16 地下壕関係の聞き取り調査 (日吉・箕輪)
 8/18 平和のための戦争展プレイベントCコース日吉台を歩く 90名
 8/19 横浜市教育委員会文化財課、危機管理室との話し合い(文化財調査について)
 8/24～25 第6回戦争遺跡保存全国シンポジウム山梨大会 参加15名
 分科会報告 第一 新井 第二 関崎 第三 岡上・富澤
 8/28 地下壕見学会 午前 (港北区社会科教員研究会) 43名
 午後 東鴨居中学校 (職員・保護者・生徒) 40名
 8/29 地下壕見学会 調布市北部公民館平和フェスティバル 30名
 第3回運営委員会 (慶応高校物理教室)

予定

- 9/17 第4回運営委員会 会報64号発送 (慶応高校物理教室)
 9/22 定期見学会
 9/24 地下壕見学会
 9/29 平和のための戦争展プレ・イベントDコース箕輪を歩く
 10/10～14 第10回横浜・川崎平和のための戦争展 (慶応大学日吉キャンパス)
 10/20 平和のための戦争展アフター・イベント生田を歩く Eコース

会計のお問い合わせ：白鶴邦子 神奈川区白幡向町20-49 045-402-9090

見学その他のお問い合わせ：喜田美登里 港北区下田町2-1-3 045-562-0443

ホームページアドレス： http://www.geocities.jp.heatland-hanamizuki/2402

日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会 (郵便振込口座番号) 00250-2-7-74921
--

代表 大西章 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会

編集 日吉台地下壕保存の会運営委員会

会員寄稿

「伊勢神宮と天皇制」

関崎益男

7月31日から8月3日まで、三重県伊勢市・鳥羽市を訪れた。初日は、地元の人の案内で伊勢神宮の内宮（伊勢市宇治館町）を散策した。近代天皇制によって作られた景観、明治大正期の宮域拡大、唯一正宮（しょうぐう）と同じ神明造りの御稲御倉（みしめのみくら）橋欄干「ねぎ型カナモノ」に残る中世の銘文などを見学。おかげ横町で買い物をした。1993年おかげ横町がオープン。場所は宇治橋の外の内宮門前。それ以前は正月以外さびれた道筋だったという。十年前と比較すると、県内でも有数のリピーターの多い観光地になった。伊勢市の純和風建築に対する低利融資は条例のおかげ。

写真は、風日祈宮（かぜひのみのみや）を右側から撮ったものだ。もともとは風神社だったが、元寇がきっかけで別宮に昇格。社殿の前の 舎（あくしゃ）に注目。これは社殿に参拝するときの日よけ雨よけだ。

風日祈宮に行くには、宇治橋・神苑（19世紀ドイツ風庭園）・火除橋（ここから神域）・手水舎（てみずしゃ）・滝祭神（たきまつりかみ）などを通る。

ところで7月中旬『いま特攻隊の死を考える』（岩波ブックレットNo. 572）を読んだ。また映画「ほたる」もテレビで放送された。明治政府は幕府に代わる権威として天皇を利用しようとした。しかし畿内を除いて、天皇という存在を（民衆は）ほとんど知らなかったという。そこで同政府は全国的に知られていた伊勢神宮（皇太神宮）を利用して、天皇のPRをする。伊勢神宮は図らずも「神社の総本山」にされたのだ。明治憲法下、統帥権を持つ天皇の裁可を得ていない“統率の外道”として、沖縄の海に消えていった特攻隊員と農業神から皇祖神・軍神に変えられていった伊勢神宮。この夏私はこの両者の矛盾をいだきつつ暑い日々を過ごした。（高校・塾講師、川崎市中原区）